

# 芸術としての宗教音楽論・宗教演劇論

横山 正子・法月 敏彦

キーワード：中世劇、宗教劇、典礼劇、受難劇、神秘劇、宗教音楽

## 緒言

本研究は2019年度「学内学術研究振興費」で採択された共同研究「宗教芸術論とくに宗教劇論の構築に関する萌芽的研究」成果の一部である。まず当該研究課題に関する研究背景・研究目的・研究方法について述べる。

研究背景：宗教芸術とくにキリスト教芸術に関する研究は、主に美術・建築の研究が夙に行われてきた。例えば、C.R. モーリ・G. ファーガソン著『キリスト教図像辞典』などである。音楽では、ほぼヨーロッパ音楽の源流といえるほど広範囲の研究が存在する。演劇では、中世以来の宗教劇（オラトリオ）、典礼劇、復活祭劇、降誕祭劇、受難劇（聖史劇）、聖史サイクル劇、神秘劇、道徳劇、パジェント（ページェント）などが別個に研究されている。

共同研究者兩名はともに本学開講「宗教音楽史」「宗教演劇研究」の科目担当者であり、音楽と演劇が不可分の関係性をもって成立してきた宗教劇の実態を熟知している。すでに、授業に必要な文献・楽譜・映像資料の収集と整理は完了しているが、世界規模での宗教音楽と宗教演劇、とくに宗教劇という観点からの収集は未完である。

研究目的：本研究の大きな目的は、新しい宗教芸術論の構築である。その方法論のひとつとして、研究対象にキリスト教の宗教劇を取り上げる。その理由は、宗教劇という場においては、ほとんどの場合、音楽と演劇が一体となったパフォーマンス形式で存在しているのが常態だからである。したがって、本来の宗教劇形式として捉えなおすことをもって、今までにない独自性を獲得することが可能であると考えた。

研究方法：萌芽的研究としての本研究は、文献・楽譜・映像資料等の収集によるものとし世界規模で展開している宗教劇の実態把握を目指すものである。また、文献研究の対象は、既述のオーバーアマガウの受難劇をはじめとするドイツ、世界無形文化遺産の傑作宣言されたスペイン・エルチェの神秘劇、さらに、イギリス、フランス、アメリカに点在する宗教劇を包含する。

以下、横山による典礼劇に関する考察、法月による研究成果報告を記す。

## I 典礼劇《ダニエル物語》に関する一考察 一行列歌における楽器使用を中心に

### はじめに

2020年は、オーバーアマガウの受難劇が上演されるはずの年であった。よく知られているように、この劇は1634年に上演が開始され、その後現代にいたるまで、数回の例外を除き10年に一度のペースで継続されている。そもそもの始まりは、疫病収束への祈願であった。17世紀前半、ヨーロッパにはペストが蔓延し、膨大な数の死者と町村の破滅に直面していた。絶望が高まる中、1633年、オーバーアマガウの人々はペストが収束することを神に祈り、「もし祈りが聞き届けられたら、10年に一度、キリストの受難劇を上演する」という約束をした。その後、この村からペストの死者は出なかったという。村人たちは神との約束を守り続けた。2020年は第42回の公演の年であった。しかし、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の脅威は、疫病の収束を願って始められた受難劇をも延期に追い込んでしまった。残念なことこの上ない。

さて、オーバーアマガウに代表される受難劇は、ラテン語およびヨーロッパ主要俗語で書かれた、中世劇の流れを汲んでいる。中世劇の数は膨大であるが、宗教に関わる内容のものは、典礼劇と俗語の劇の二種類に分けることができる。このうち典礼劇はラテン語の台詞を持ち、音楽がその構成における中心となり、劇の進行役を担う。しかしながら、これまで典礼劇テキストの研究に比べ、音楽面の研究は端緒についたばかりの感があり、多くの課題を残している。本稿でとりあげる《ダニエル物語》は、完全な形で残されている貴重な典礼劇であるが、波乱万丈の物語は劇作品としても音楽作品としても高度な成熟を見せている。本稿ではこの作品を「行列歌」の視点からみなおしてみたい。

### 1. 中世劇という非日常

中世の人々の生活は、キリスト教信仰と自然への驚異と民間の迷信の中で営まれていた。放浪者と定住者という二つの身分が存在し、街道を隔てた村々はおのこの孤立しており、人的交流はきわめて特異なあり方だった。この中で「笑い」が許容され、生活を活性化できる機会として、さまざまな祭りが文化の中核となっていた。中世はまさに祭りの時代といえる。教会暦に即した復活祭、聖霊降臨祭、降誕祭と十二夜、公現祭、謝肉祭、季節の祭りとしての五月祭、夏至祭などは、婚礼のような家族的祭り以上の求心力を持っていた。さらにさまざまな職業の各守護聖人を祀ったものもあり、地域、時代によって差異はあるが、かなりの数にのぼる。祭りは放浪者と定住者の合流地点でもあり、無礼講が公に許諾される非日常空間であった。

祭りの中心として欠かせないのが劇である。規模や台本に差異はあれ、これらの劇の多くには音楽が伴われた。音楽はこの非日常空間現出には欠かせない要素であった。その中で宗教的儀式から生まれた典礼劇においては、もともとグレゴリオ聖歌の変容から生まれ

たものであり、当然のことながら音楽が主要な役割を担う。これらの劇は主として信者の教化のために発展し、特に復活祭、降誕祭などの祭りで繰り返し用いられ、12～3世紀ごろに最盛期を迎えた。

## 2. トロースから典礼劇へ

西洋音楽史の原点ともいえるグレゴリオ聖歌は、ローマ・カトリックの祈りの形として教会と修道院で唱えられてきた。もともとは決められた祈りの言葉に抑揚がつけられた単旋聖歌であったが、かなり早いうちから修道士自身によって変容が加えられた。トロースはそのひとつで、祈りの言葉に説明文のような新しい歌詞を挿入したり、それにつける旋律も加えたりする手法である。このトロースは、特に復活祭や降誕祭などのミサにおいて、次第に劇的要素を帯びるようになってきた。たとえば、復活祭の入祭唱に付された対話形式のトロースでは、イエスの墓が空であることを発見する三人のマリアと天使に扮した聖歌隊員が登場し、ペテロやヨハネに主の復活を告げに行く場面が付け加えられる、ということが行われた。ここで既に、このトロースは劇音楽と呼ばれるにふさわしいものになっており、簡易な形の典礼劇がここに形作られている。

典礼劇という呼称は、ラテン語で歌われる宗教的な対話、儀式、劇などを指す語であるが、現在残されている典礼劇のレパートリーは、地域の特定制とともに大変入り組んでおり、いまだ整理の途上にある。また、典礼劇と典礼、劇と儀式を区別することも困難である。いずれにしても、トロースが次第にグレゴリオ聖歌から大きく逸脱していったように、典礼劇も典礼そのものからは離れていき、時には喜劇的な場面、世俗的要素も加えられていったとみられている。「預言者モーゼが麻くずの髯をつけ、角をはやして出てきたり、聖女エリザベートが大きなお腹をして出てきたりすると、観客である信者たちはどっと笑いをまき起こす。こうなると、すでに典礼劇という枠からはずれたものになってしまっていることがわかる。」<sup>i</sup>

典礼劇に使われる音楽的題材については、トロースの旋律や既存のアンティフォナのほか、《カルミナ・ブラーナ》に収められたゴリアルドゥスの旋律など多種多様である。K. ヤング<sup>ii</sup>と R. B. ドノヴァン<sup>iii</sup>が典礼劇のテキストを 600 余り収集しており、これに付けられた音楽的レパートリーが現在のこの分野における研究の主たる基盤となっている。

典礼劇の資料の大半はミサ典礼書に収められており、その写本に用いられた記譜法は 10 世紀から 16 世紀の記譜法の発展に伴い、多様なものとなっている。現存する楽譜付きの典礼劇写本は、その大半が降誕、および復活の劇であり、次項で述べる《ダニエル物語》もそのひとつである。ここでは 1860 年出版のクスケマール (E. de Coussemaker) による楽譜付き典礼劇集を参照した。

## 3. 《ダニエル物語》概要

この典礼劇の原典は北フランスの町ボーヴェで発見され、ボーヴェ大聖堂に保管されて

いた。現在は大英図書館に所蔵されている<sup>iv</sup>。ボーヴェを含む北フランス一帯は、英国とともに典礼劇の宝庫であり、数多くの作品が生み出された。大英図書館所蔵のこの写本は13世紀前半のものだが、劇の成立は100年ほどさかのぼり、1141年だったとされる。この事実は、一世紀にわたる年月、典礼劇のレパートリーとして何度となく上演されてきた人気演目であったことを示している。構成とあらすじは以下の通りである。

時と場所は、バビロン捕囚時代のバビロニアである。

冒頭で、この典礼劇を作ったのはボーヴェの若者たちであることが誇らかに述べられる。続いてベルシャツアル王と諸侯たちが入場する。宴の席で酒に酔った王は、先代の王がユダヤの神殿から略奪してきた壺を持ってこいと命じる。壺が届くと、突然不思議な手が現れ、「メネ、テケル、バルシン」という文字を壁に書く。王は国中の賢者を呼び集めて問いただが、だれも解読できない。そこに王妃が登場し、牢に捕らえられているユダヤの捕囚ダニエルなら、読み解くことができるのでは、と助言する。さっそく連れてこられたダニエルは、このように解読する。「神が王の非道を怒っている。断罪の時が近づいた」と。王はダニエルをねぎらい、王妃は女性の知恵を讃える行列の歌とともに自室へ戻る。そこへダレイオス王が臣下とともに登場、ベルシャツアル王は追い落とされ、殺害される。

ダレイオス王はダニエルを高く評価し、後見役に取り立てる。これを妬んだ臣下の者どもは、王を騙してダニエルを陥れ、ライオンの穴に投げ入れさせる。王は彼を救うことができず煩悶する。しかし神はダニエルを助け、天使に護らせる。王はダニエルの無事を喜び、奸臣どもをライオンに食わせてしまい、ダニエルの信じる神（ユダヤ教の神）が唯一の神であると宣言する。ダニエルは救い主の到来を予言し、これに応答して天使が、喜びに満ちてイエス・キリストの降誕を告げる。

物語は旧約聖書ダニエル書に基づいて書かれている。最後のキリスト降誕を告げるくだりは、もちろんダニエル書にあるはずもない。この付加部分が、《ダニエル物語》をクリスマスのための劇ではないかという推測を呼んでいる。しかし、現在のところ確証は得られないままである。

劇全体に使われている旋律は少なくとも50にのぼり、大半が音節を持っていて、ラテン語の抑揚に自然に合うようになっている。単旋聖歌に似たものもあるが、むしろゴリアルドゥスなど、当時の吟遊詩人が歌っていたであろう旋律の影響を思わせるものが多い。

#### 4. 行列の音楽

《ダニエル物語》の大きな特徴として、行列の音楽、すなわちある種の行進曲が数多くみられることが挙げられる。劇のト書きに *conductus*（行列歌）と明記されているものと、そうでないものがあるが、いずれも歌詞が付き、歌いながら行進が行われる。行列歌は、当時教会で新たな声楽分野として流行していた。ミサの前後に歌われたが、典礼劇においても、主要な役どころが入場したり退場したりするときに歌われていた。この行列歌の使

用がとりわけ目立つのが、この《ダニエル物語》と《ヘロデ王物語》である。また、《ダニエル物語》全体を通し、楽器の使用が指示されているのが、この行列歌のうちの「壺の入場」「王妃の入場の行列」「ダレイオス王の入場」の三カ所のみであることも目を引く。

《ダニエル物語》の行列歌は以下の通りである。

- ・ベルシャツアル王と諸侯の入場
- ・壺の入場
- ・王妃の入場の行列 (conductus)
- ・ダニエルの行列 (conductus)
- ・王妃の退場の行列 (conductus)
- ・聖なる壺をダニエルのもとに運ぶ行列 (conductus)
- ・ダレイオス王の入場
- ・ダニエルの行列 (conductus)

「壺の入場」では、歌詞の中でベルシャツアル王とその先代の王の、ユダヤ略奪をほめたたえ、「喜びの声を響かせて 神聖な歌を歌い、キターラを鳴らし、手を打ちながら、数え切れぬほどの旋律を歌おう」とある。

「ダレイオス王の入場」には、ト書きに以下の指示がある。「突然ダレイオス王が部下の諸侯たちを従えて現れる。王に先立って、キターラ弾きと諸侯たちが、次のように歌いながら、やって来る」さらに行列歌の台詞にも「皆で感謝を捧げよう、太鼓の音を響かせよう、キターラの弦をかき鳴らそう、あらゆる楽器を響かせて、彼の栄誉をたたえよう。<sup>v</sup>」この歌の直後、ベルシャツアル王は殺害される。

キターラは古代ギリシャに由来する小型の堅琴であり、王の隆盛と没落を描くにはいかにも控えめに思われる。しかしながら、《ダニエル物語》全編を通して唯一楽器名が指定されていることは、作者であるポーヴェの若者たちになんらかの意図するところがあったと考えざるをえない。現代の上演では、王の威光とその言葉を表すのにショーファルのファンファーレや、行列を先導する太鼓など、華やかな楽器が用いられることが多い。楽器の使用について、自由な解釈が許されると考える演出は許容できるものではあるが、グレゴリオ聖歌から発してきている典礼劇の伝統として、楽器伴奏がドラマを盛り上げる目的で多用されていたとは考えにくい。ただし、キターラは古代ギリシャにおいては、太陽と音楽の神アポロンの楽器として彫刻などにも残されている。天体の調和を表現する神聖な楽器であった。そもそもキターラは専門家のための楽器であり、舞踊や朗誦、頌歌の伴奏をするほか、重要な歓迎の席、国の公的競技の場では専門家による独奏が行われた。この歴史的認識に照らせば、キターラは必ずしも控えめな堅琴とは言えず、王の栄光賛美と、政権交代という場使用されるにふさわしい楽器であったのかもしれない。

「王妃の行列」では、「喜びの歓声に迎えられて いよいよ王妃のおでした。絃をかき

鳴らし、声をそろえて、快い音色を響かせよう」という台詞である。ここでの「絃」は cordis であり、キターラ cytharizent のような楽器名は記されていない。旧約聖書に現れる弦楽器にはヘブライ語のキンノール、ネベルなどがあるが、それがどのような楽器かは推測の域を出ておらず、したがってここに現れる「絃」も、はたしてキターラと同じであるのか、あるいは女性である王妃を讃えるにふさわしい別の楽器であったのかはわからない。

## 5. 行列歌にひそむ作者の意図

最後に、ポーヴェの若者が行列歌にひそませた「本音」について考えてみたい。

最初の行列歌では、これから語られる《ダニエル物語》のあらすじが示される。この行列はベルシャツアル王と諸侯の入場なのにもかかわらず、王を讃える歌ではない。しかも、まもなく政権交代が起こることには触れず、あたかも最後までベルシャツアルが係わっているかのように歌う。ダニエルを高く評価し、取り立てたのもベルシャツアルであると述べている。すなわち、偽りを歌う行列歌なのだ。盃の入場では、ベルシャツアル王とその先代ネブカドネツアルを盛んに讃えるが、彼らのユダヤに対する暴虐を明確に述べ、次の場面（不思議な手によって断罪される）につなげる。王妃の入場では、美しく賢い女性への賛美が歌われるが、その中に「この方を見つけ出された、無名の預言者の謎解きで、王は破滅の時が近づいたことを、知らされるのだ」と短く告げている。そしてすばやく、再び美しい王妃のおでましを歓迎する台詞に戻る。このように、行列歌には華やかな賛美の陰に篡奪者への批判が、複雑な形で差し挟まれている。ダレイオス王に権力が移行してからは、行列歌はダレイオス王の前に進み出るダニエルの行進のみであり、それ以降、劇は対話形式で進められていく。これも、行列歌の持つ役割が、単に主要人物の入退場を飾るものではないことを示唆している。《ダニエル物語》が市民の経済力を背景に、町の青年たちによって制作・上演されたことを考えると、そこにはある種のレジスタンス、市民のパワーというものが隠されているのではないか、と思いを巡らしている。

(横山正子)

## Ⅱ 全国各地の宗教劇 (研究成果報告)

### 1. 南山大学の第53回野外宗教劇『受難』

公演場所：名古屋市 南山大学パッヘスクエア及びグリーンエリア (野外)

調査日時：2019年10月19日(土)18時～20時。当初は10月12日開催予定であったが雨天順延となった。なお、19日も開演時までは少雨であったが開催を決行し、終演時は晴天となった。

#### ・受難劇の概要：

日本で唯一継続的上演を行う宗教劇である。内容はイエス・キリストのエルサレム入城

からゴルゴタの丘における十字架上の死を経た復活までを、課外活動団体「野外宗教劇 (PPC)」部員の学生たちが演じる野外劇で、出演、脚本、衣裳、メイク、演出その他宗教劇に関わるすべてを学生たち自身が行い、基本的に同じ筋だが、毎年新たな解釈が加えられる。「野外宗教劇部 (PPC)」は演劇や音楽を専門とする学生団体ではないが、1963年以来の伝統に支えられ、大学・学生課・卒業生の強力な支援を得ている。

・南山大学における宗教劇の沿革：

第1回公演は、文学部仏語学仏文学科の学生小谷昭彦氏を中心に、上智大学教授ホイヴェルス神父作『受難』の脚本に拠り、仏文学史担当木村太郎教授 (1899～1989) の協力を得て1963年11月11日南山教会聖堂前で行われた。

第2回公演からは、グレバン作・木村太郎訳『受難』にアレンジを加え、南山大学独自の『受難』が作られていき、第3回公演から更に新しい舞台演出を試み、今日に至っている。

なお、南山大学受難劇創始期の基本となったグレバン作・木村太郎訳『受難』は、その後、劇作家原千代海 (1907～2005) の新訳『受難の聖史劇』として、岡田陽 (1923～2009) の演出で、東京の日本都市センターホールに於いて1967年玉川学園・玉川大学文学部芸術学科が上演した。

・演劇的特色：毎年、学生が執筆した脚本をもとに上演され、2019年度のテーマは「運命」であった。舞台照明・音響の設置・操作に関しては若尾綜合舞台によって運営された。

・音楽的特色：学生のアレンジによる上演のため、音楽に関してはその都度、どのような音楽を使用するかという演出形態が異なるが、例えば2016年の第50回公演では、聖歌隊南山大学スコラ・カントールムとコラボレーションが行われた。

・取材による収穫：

1970年代の中断はあるが、上演形式そのものではなく、イエス・キリストのエルサレム入城からゴルゴタの丘における十字架上の死を経た復活までを新約聖書から脚色して追体験するという活動を通して初めて得ることができる一種の宗教体験、その精神が脈々と受け継がれているという実態に接することができた。

## 2. 文献の収集とその研究成果

今回の研究で収集することのできた文献に拠る宗教劇の概要を、具体的に掲出する。

・イギリス：ヨーク・サイクル（ヨーク神秘劇）

場所：ヨーク

日時：長く中断していたが1951年に復興した。

内容：山車形式の舞台（パジェット）で48の神秘劇作品群（サイクル）を数日間演じるものである。もともとはフランスで15世紀に始まり、その後欧州で広まった形式の宗教劇である。イギリスのサイクルは、多数の神秘劇作品を上演する形式のため、新約聖書を基にしたキリストの降誕、受難、復活などの劇だけでなく旧約聖書や聖書外典に拠る作品も多数含まれている。キリストが死後に死者の国を訪れた（Descent into Hell）という作品などが有名である。

なお、イギリスで戯曲の残っている他の神秘劇には、「ウェイクフィールド・サイクル」、「リンカーン神秘劇（N-タウン劇、ヒュージ・サイクル、ルーダス＝コヴェントリー・サイクル）」、「チェスター神秘劇」などがある。

・フランス：受難の聖史劇

場所：ノートルダム大聖堂前

内容：グレバン作『受難の聖史劇』現代改訂版（これは南山大学『受難』の原型となった作品）で、並列（同時）舞台という各場面を象った装置（マンション、一種の山車）を広場に並べて出演者がそれぞれの装置を回って演じる形式である。プロローグと全6場の構成となっている。

プロローグ

第1場「イエスの敵たちの腹黒い陰謀。枝の主日、イエスのエルサレム入場」

第2場「イエス弟子たちと「最後の晚餐」をされ給う。わが救い主がやさしき、ありがたき聖体の秘跡を施し給うこと」

第3場「いかにして悪らつなユダヤ人がわが救い主を、ゲッセマネの園で捕らえたか」

第4場「わが救い主、大司祭の前に引き出され、次いでピラトの前に引き出され給うこと」

第5場「イエスが十字架をにない、いとも残酷にゴルゴタの丘へ引かれ給うこと」

第6場「「されこうべの場所」でわが主が十字架にかかり、いともみじめに死に給うこと」<sup>vi</sup>

・フランス：ダニエル物語

詳細は横山の考察に記載。

・ドイツ：オーバーアマガウのキリスト受難劇

場所：バイエルン州オーバーアマガウ村の専用劇場（収容人員5000名）

日時：10年に一度上演。但し2020年はCOVID-19蔓延の影響で2022年に延期。通常は、5月～10月に全100回の公演を行う。

内容：1632年のペスト大流行を契機に、1634年以降まで、イエス・キリストへの感謝を籠めて多数の村人により新たに創作・作曲・上演されている。出演者等の総数は村民の半数にあたる約2500名である。出演者だけでなく、オーケストラによる演奏、混成合唱も村人によって行われる。上演時間は朝から夕方までの約6時間で、途中で食事休憩がある。一例として掲載する2000年上演の構成は次のとおりであった。以下、学習院大学の古庄信氏に拠る構成台本から抜粋する。<sup>vii</sup> なお、活人画とは、静止した扮装した人物の静止した人物画的表現であり、絵画等で馴染み深い場面が描かれるものである。

序幕 バスによるソロコーラス。

〔活人画〕新しいアダムとしてのイエスがエデンの園で失われた命への門を開く。(この間、コーラス：「イエスは我らを導きたもう」)

第1幕 イエス、エルサレムへ入場。群衆、イエスを称え「ホサナ」(神を讃美する叫び「言葉」の意)を合唱。

第2幕 イエス、弟子たちとベタニアのラザロ、マリア、マルタを訪れる

〔活人画〕トビアス、盲目の父の癒しを求めて旅立つ。テナー独唱「いまやイエスの別れのときが近づいた!」。合唱「イエスよ我らを見捨てたもうな」

〔活人画〕雅歌より愛する人を慕う。ソプラノ独唱「花嫁の嘆き」、合唱「友は帰ってくる」

第3幕 イエス、エルサレムへもどる。

〔活人画〕シナイ山から神の律法の石板をかかえてモーセ、民は金の牛像を神と仰ぎその周りに集まる。コーラス「黄金の像に我らはひざまづく」。モーセ(バス独唱)「何とおぞましき人々の罪」。イエス(バス独唱)「あなた方を父のもとへ導かせたまえ…」

第4幕 最後の晩餐

〔活人画〕出エジプトを前にして過越しの食事。テナー独唱「ときは近づき、イエスの使命は達成される」。アルト独唱(神)「私はイスラエルの叫びを聞いた、道を示そう」。合唱「イエスの慈しみは永久に」。

第5幕 オリーブ山にて

〔活人画〕ギベオンの岩陰でアマサの裏切り。バス独唱「ゲッセマネの園で、ユダはイエスを引き渡す」。合唱「汝を見失いし人々は闇の道を歩むだろう」。

〔活人画〕燃えさかる柴の前のモーセ。合唱・主の声「主は燃える柴の中からモーセを聖なる領地に送り込まれた。イエスもまた、逃れようとする自らの抵抗と争い、祈る…」。合唱「苦悩の戦いは、ゲッセマネにて始まった! 罪人らよ、この光景を忘れるな」。ソプラノ/アルト「見よ、彼の手かせは、汝らの自由の証である」

第6幕 アナスの前に引き出されるイエス - 嘲り - ペテロの裏切りと悔恨。

〔活人画〕ライオンの穴の中の預言者ダニエル。アルト独唱「聖なる人は裁きにのぞむ...」。合唱「ダニエルに死を！人は彼を死に至らしめ、イエスも裁きの前に尋問される。」

〔活人画〕みじめなヨブ。バス「苦しみにあえぐヨブを見よ...」。合唱「だが彼はその苦しみに耐えた。イエスを見よ、沈黙のうちに罵りに耐える様を...」

#### 第7幕 カイアファの尋問

〔活人画〕失意のカイン、弟アベルを殺す。テナー独唱「主は延べたもう『その男に災いを』彼が生まれなければよかった」。合唱「見よ、ユダは暗黒の闇へと落ちていく。なぜ弟子たちはひとりとして彼を止めようとししないのか？…主よ、全ての人々に安らぎと赦しを！」

#### 第8幕 ピラトによる最初の尋問

〔活人画〕モーセ、ファラオに追放される。バス独唱「死刑、それは遂に宣告された！聖なる人は追放された。汝ら悔い改めよ」。合唱「全ての民よ、イエスのまばゆい光を見よ！」。バス「ああ、イエスは連行され、ピラトの権力へと引き渡された！彼もまた主を認めようとししないだろう！」。合唱「こうして偉大なる預言者は侮られた。義を行うために遣わされた人は誤解され、神の子は切り捨てられた！神に向けて、我々の門を開かなければ我々の同輩らも憎しみの対象となるのだ。」。合唱「イエスよ、何という人か！我らを悪より救い出されるために耐え忍ばれる。」

#### 第9幕 ピラト、イエスに死刑の判決を下す

〔活人画〕エジプトの救済者、王として称えられるヨセブ。合唱「それはエジプトに響くであろう、『ヨセブ、万歳！』と。」。ソプラノ「あなたは人々の光と喜び。ヨセブ、エジプトはあなたに今日、敬意を表します。」。合唱「ヨセブ、万歳！民の王！」

#### 第10幕 十字架の道—十字架刑

〔活人画〕イサク、アブラハムの子、モリアの山へ捧げものの木を運ぶ。合唱「ほめまつり、感謝の言葉をささげよ！苦杯を飲みし人は今や十字架の死に向かう。」。アルト独唱「モリアへ薪をイサクが運んだように、イエスもよろめきゴルゴタへ...」。合唱「祈りと感謝を！苦杯を空け世界と神の和解のために死へと向かわれる人へ。」

〔活人画〕イスラエル人ら青銅の蛇を見て救済を得る。バス独唱（イスラエル救済についての物語）。合唱「祈りと感謝を！苦杯を空け世界と神の和解のために死へと向かわれる人へ。」

#### 第11幕 復活

合唱「ハレルヤ、主は地獄の権威に打ち勝った！ イエスを称えよ、力と栄光が永遠に彼と共にあるように！」

・スペイン：エルチェの神秘劇<sup>iii</sup>

場所：バレンシア自治州エルチェ市サンタ・マリア・デ・エルチェ教会

日時：毎年8月14日と15日

内容：伝説では13世紀なかば(1265年頃)、有力な説としては15世紀、上演記録としては1530年以降上演されている2幕の聖母マリア被昇天劇である。

第1幕「黄昏：使徒と天使に見守られた聖母マリアの永眠」、第2幕「祝祭：聖母マリアの被昇天」であり、すべて歌による表現で聖母マリアの死と載冠の叙情劇が進行する。

伴奏は、パイプオルガン、ギター、ハープ等である。天上を示す教会最上部の天井から、巨大なゴンドラ(石榴の実とアラセリ)に乗った天使が下降して地上に降り立つ演出がとくに有名である。ユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作」として宣言されている。

・アメリカ、カナダ：キリスト宗教劇の展開

イギリスで発展した神秘劇の伝統がアメリカとカナダに伝わり、祭日などの行事として行われていった。また、このような上演される演劇形式の宗教劇とは別の展開として考えられるのは、アメリカで発達した映画産業としての宗教劇である。それは夥しい数の映画作品を生み、ひとつのアメリカ文化ともいえるものを形成していった。<sup>ix</sup>

(法月敏彦)

## 註

- i 今谷和徳『中世・ルネサンスの社会と音楽』音楽之友社、1990 91～92頁
- ii K. Young, *The Drama of the Medieval Church*, Oxford, 1933
- iii R. B. Donovan, *The Liturgical Drama in Medieval Spain*, Toronto, 1958
- iv The British Library, Mss. Egerton 2615, fols. 95-108.
- v 吉川文「典礼劇 ダニエル物語」の項目『キリスト教音楽の歴史 各曲解説・歌詞対訳』日本基督教団出版局、2001、83頁
- vi 永野藤夫訳による。『世界の演劇文化史』原書房、2001
- vii 古庄信「オーバーアマガウ・キリスト受難劇の上演とその意味について～劇中の女性たちの役割を中心として～」『学習院女子大学紀要 第3号』2002
- viii 田尻陽一「「エルツエ宗教劇」研究 -1「聖母マリア被昇天劇」の上演をめぐる」龍谷大学仏教文化研究所編『龍谷大学仏教文化研究所紀要19』1980年9月。  
同「「エルツエ宗教劇」研究 -2「聖母マリア被昇天劇」の上演をめぐる」龍谷大学仏教文化研究所編『龍谷大学仏教文化研究所紀要20』1982年3月。
- ix 木谷佳楠『アメリカ映画とキリスト教—120年の関係史』キリスト新聞社、2016

## 参考文献

- 上尾信也 [1993]『歴史としての音』柏書房
- 阿部謹也 [1981]『中世を旅する人々』平凡社
- 今谷和徳 [1990]『中世・ルネサンスの社会と音楽』音楽之友社
- 金沢正剛 [2001]『キリスト教音楽の歴史』日本基督教団出版局
- ヴェルドン、ジャン [2002] 池上俊一監修『笑いの中世史』原書房
- スティーブンス、ジョン 奥田宏子訳「中世劇」の項『ニューグローブ音楽大事典』

ハーパー、ジョン [1991] 佐々木勉、那須輝彦訳『中世キリスト教の典礼と音楽』教文館  
Coussmaker, E. de, [1860] *Drames Liturgiques de Moyen Age (texte et musique)*, Rennes Imprimerie de H  
Vatar  
Koerndle, Franz, *Liturgische Dramen, Geistliche Spiele, Die Musik in Geschichte und Gegenwart* (横山)

**参考音源**

CD 典礼劇「ダニエル物語」日本基督教団出版局 HCM-5  
CD 典礼劇「ダニエル物語」ポリグラム株式会社 POCL-5203 (横山)